

関西農業史研究会報

No. 24. 1982.3.31

1982.1.23 第40回例会 (出席者 7名)

荒木幹雄氏「戦前近郊農業経営の
発達—京都府南部地域における—」

【報告要旨】

▶報告は、昭和2～3年に京大農経教室が、京都府南部地域の農家に委嘱して作成した農家経済調査簿の内容を、整理・紹介したものであり、そのことを通して生産様式（技術と経済の対立的統一）の細胞である地主制下の農業経営の構造分析を行なふとした。そのため分析方法として、自然的・社会的環境のなかで、労働力が労働手段を用ひ、労働対象に働きかけることにより成立している農業経営を、技術（労働過程）と経済（価値形成過程）の基本的二側面へ対立的統一として捉えるという視角をとった。そのため技術については、経営の場に亘って運動しつつある技術の構造＝体系、経済は経営の場に亘って運動しつつある経済の構造＝体系を具体的にとらえるように努めた。

▶報告においてとりあげた農業経営は、久世郡寺田村の果樹作

自小作中農経営と綾喜郡大庄村の地主富農経営、および昭和14年の綾喜郡都々城村下奈良部落の経営であった。

►分析手順として、各経営の農業生産の要素、生産概況、労働状況、土地利用、肥料、生産物の出荷、農業経営費、農業粗収益、農業純収益などを検討し、統いて農外部門、家計部門についても分析した。

►結論として、戦前の近郊自小作農業経営は、生産要素の拡充により規模拡大を図っていたが、そこには規模による生産力格差が形成されるに至っておらず、経営の技術発展は多様な品目を結合した多角経営(たゞし輸作経営ではない)を形成し、生産の要素、とくに労働力の有効利用を追求していたこと。こうして多様な商品生産を発達させてはいたが、地主制下の経済条件が技術の発展を歪めていた。すなわち、小作経営においては小作料支払への重圧が、肥料代の支払を圧縮し、果樹作部門には肥料を投入しているが、米作部門にまでは肥料を投入することを不可能とし、生産力発展の桎梏となっていたこと。また地主経営では、年雇労働力を使用し、一見富農経営として発展しているが、経営内容を検討すると、小作料収入に大きく依存し、自家経営の内容は、技術的にも低位であり、収支内容を劣悪であったと、すなわち寄生地主化の方向をたどり、耕作地主としての生産力的優位は見られなくなっていることを明らかにして。

こうして近郊農業の発達は、生産力的な益みをもつてゐるとは

いえ、自小作經營によって主として担われ、恐慌を経過した後の昭和10年代初頭においてもさうに自小作中農經營が前進していることを示した。すなはち地主制(寄生地主的土地位所有)は、生産力発展に対して、ますます不要のものとなり、農地改革が農業内部からも必然化したのであった。

►以上の通り、經營分析をとおして生産様式としての地主制の矛盾の展開(技術と經濟の対立的統一の發展)を検討した。

【討論要旨】

- ①技術発展の障害となっていた小作料支払に対して、いかに対処したのか。小作農家はそれを自覚しており、小作争議などで减免を獲得していく。そして、自作化の方向で經營発展を実現していく。
- ②貧農小作經營は、何故脱農(せいか)か。兼業収入による何とか生活できだし、どちらが有利であるという經濟合理性だけでは割り切れないものが農民にあつた。
- ③その他に、野菜果樹の專業地域はいかに形成されたか、商品作物の作付体系はどうなつたか、特に島畑景観等について討論された。



1982・3・6 第41回例会 (出席者12名)

飯沼二郎氏「エジプト・イスラエル・
斎藤政夫氏 トルコの農業事情」

第41回例会は、飯沼・斎藤両先生が、年末から年始にかけてさむた中近東の様子を、スライド付きで報告して頂きました。以下は、飯沼先生の「エジプト・イスラエル紀行」です。

▶やたらしたちが、日常、使っている道具や機械、たとえば電気洗濯機や電気掃除機、あるいはトラクターやコンバインなどが、可べて人間だと考えたら、古代オリエントの奴隸社会を、少しほ想像することができるかもしれない。戦争によつて勝利した民族は、敗れた民族を奴隸にして。そのほか、債務奴隸といつて、借金を返済するために売られた人々もあつた。紀元前13世紀の頃、モーセという指導者に率いられて、エジプトでの奴隸状態にあつていたイスラエル民族が、エジプトから逃げ出し、40年間、荒野をさまよつた末、涙と蜜の流れる国、今のイスラエルに侵入した物語は、旧約聖書の冒頭の六書に収められている。私も、かねてから、このイスラエル民族の「出エジプト」の経路を、実際に自動車などで、てみたないと考えていた。しかし、数年前までは、エジプトとイスラエルは国交断絶状態にあつたので、この希望は満たされなかつたが、サダト大統領の対イスラエル政策の転換によつて、両国の国境は開放された。政情不安定な中近東のことだ。また、いつも閉鎖されるかも分からぬ。今の間に、てあこう。こう思つて、昨年暮れから本年初めにかけて、エジプト・イスラエルへ出かけを行つた。

▶早朝、まだ暗い内にカイロを出発する。お反りが次第に明るくなると、車は広大な砂漠の中を走つて、紅海を渡つて

も、砂漠はなあ、果てしなく続いている。ところどころ、遊牧(トランセンド)しているベトウン人のテントが見かけられるだけだ。やがて国境を越えてイスラエル領内に入り、ガザの町に近づく頃から、周囲は次第に緑をまし、耕地には麦が生え、樹木が見らかうようになる。全く緑のない沙漠を通って来た者の目には、まさに豊かと蜜の流れる園である。



►エジプトとイスラエルでは、なぜこのような変化が見られるのか。それは主として雨量の違いによる。カイロをはじめエジプトの年雨量は大体100mm前後だが、ガザ地方をはじめイスラエルの年雨量は大体600mm前後である。だからエジプトでは、ナイル河の水によって灌漑を行なう以外には、農業は全く不可能だが、イスラエルでは、國中ほほどこでも、雨水で農業を行うことができる。

►旧約聖書の『申命記』1章10節以下に、砂漠の中をイスラエル民族を率いてイスラエルに侵入しようとするモーセがイスラエル民族に語った言葉として、次のように記されている。「あなたがたが行つて取ろうとする地は、あなたがたが出てきたエジプトの地のようではない。そこでは、青物畠ざするように、あなたがたには種をまき、足で水を洗いだ。しかし、あなたがたが渡つて行つて取る地は、山と谷の多い地で、天から降る雨が湿つてゐる。」

►文中、足で水を注ぐというのは、耕地の周囲の高壁(といがな)と、水が溜まらない)の一部をシャベルに足をかけて掘り崩し、

耕地に水を引き入れることをいう。ナイル河のほとりには、このような高畦で囲まれた耕地が約20kmの幅で存在していた。ナイル河は、毎年5月に増水し、11月に減水する。それで、5月に耕地にナイル河の水を引き入れ、11月にまた高畦の一部を切ってナイル河の水を戻すまで、耕地に1mぐらい水をためた（一種の湿地状態になった）。水が引いたあとには、肥料や泥土が1mmぐらいの厚さで耕地を覆った。そこにト麦を播き、羊や豚を追いやると、種子を泥土の中に押し込むと、あとは翌年6月に収穫するまで何をしない。それでも、ナイル河の水が運んづくる肥料や泥土は、毎年豊かな収穫をもたらし、その上、乾燥地帯の灌漑が起こりがちな塩化現象を、ナイル河の水が地表の塩分を洗い流すことによつて、阻止された。

► ただし、年雨量100mm前後のエジプトでは、ナイル河の水がないければ、農業は全く不可能であった。だから、国王はナイル河の水を支配しさえすれば、エジプト全土の農民を容易に支配することができた（マレクスのいう隸体的奴隸制）、ナイル河の水を支配し管理するためには（具体的には、灌溉施設を作るためにも、維持するためにも）、国王は強力な官僚組織が必要とした。こうして古代エジプトには、強大な中央集権国家が成立した。これは、チグリス・エーフラテス河のほとりに成立した古代メソポタミアについても同様である。

► 一方、古代イスラエルにあっては、固中、雨水で農業が可能で

あ、下から（エジプトやメソポタミアのようぢ大きさな河川をながった）、この点は、同じく冬雨600mm前後の年雨量のある南ヨーロッパと同様である。古代のギリシアやローマの都市国家は、このような独立小農民を基盤として成立した。この意味でイスラエルは、年雨量100mm前後の中近東の大草原地帯の中に、ほんのりと例外的に存在する南ヨーロッパなものである。

► ただし、イスラエルが南ヨーロッパと違う点は、同じく冬雨600mm前後といつても、南ヨーロッパでは夏（6～8月）に年雨量の約1割の降雨量があるが、イスラエルでの夏の降水量は、6～8月の3か月を合計しても、ほとんどゼロなのである。年雨量600mmといえば、雨水で農業が可能な限界であるが、（ギリシアなどでは年の偏差は200mmぐらいいざあるが）イスラエルでは、年の偏差はギリシア等よりもはるかに大きい。それだけに豊凶の差がはげしい。古代イスラエルの農民は、神の意志に従うことによつて、神はイスラエル民族に豊かな雨と、したがって豊かな収穫を与えてくれると考えた。雨は10月から翌年の3月まで降る。10月から12月までの雨を“秋の雨”あるいは“冬の雨”、1月から3月までの雨を“春の雨”、あるいは“後の雨”と呼んだ。上述の言葉について、モーセは次のようにイスラエル民族に語る。

「そなたは、あなたの神、主が顧みられる所で、年の始めから年の終りまで、あなたの神、主の目が常にそなたにあり。もし、さう、あなたが主に命じられた命令にそく聞き従つて、あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくして仕えよ。ならば、主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨とともに、時にしだが、て降らせ、穀物と、ぶどう酒と、油を取り入れさせ、また家畜のために野に草を生えさせられよう。あなたは飽きるほど食べることができることある。あなたがたは心が迷い、離れて去つて、他の神々に仕え、それを辞むことのない。慎まなければならぬ。おそらく主はあなたがたにふかい怒りを発して、天を開げさるであろう。そのため雨は降らず、地は産物を出さず、あなたがたには主が賜わる良い地から、すみやかに離び出されよう。」

► このような極限状態で農牧生活を行う独立小農民において、やハウスの信仰は成立したのであるが、しかし、その信仰を純化したものは、古代オリエント世界における烈しい民族の興亡であった。とくにイスラエルは、北にアッシリア（後、バビロニア）、南にエジプトという二大強国の間にあって、どちらが攻めるにしても、その通路にあたつており、大海に浮ぶ小舟のよう、歴史の波浪に翻弄された。イスラエルの天水農業が天候に左右されて極めて不安定が上に生産力を低かつたのにに対して、メソポタミアとエジプトの灌漑農業は、はるかに安定していたけれども、単位面積当たりの収量を、イスラエルの4、5倍も高かった。このように

高い生産力の上に成立した中央集権的大帝国に対して、イスラエルの生産力は対抗すべくもなかなかほど低かったのである。



►エジプトの王女を王妃に迎えたソロモン王は、物的基盤もないのにエジプトの手ぬなくて中央集権的な富饒国家を形成しようとしましたため、その無理がたって、次の代には、王国は南北に分裂する。そのため、ハサハサ國力が衰え、バビロニヤトよって亡ぼされました。そのような時に、イスラエル民族から多くの預言者があらわれ、国民に、「下さうに國勢に動搖せることなく、主の救いを静かに待ち望むこと」(エレミヤ哀歌3:25)をすすめ、亡国後も、奴隸として運行されたバビロンなどにあって、イスラエル民族を励まし続けた。このような悲運の中で、ヤハウェの信仰は、ますます煉りきよめられ、ユダヤ教が確立するのである。

►私は車に揺らしながら、このようなことを考えていた。自動車は、既にとつぱりと暮れに夜の闇の中を走り続けていた。目的地エルサレムに到着したのは、午後八時を回っていた。その日は12月24日、クリスマスの前夜であった。

渠手宣言(1)

►農業史研究会の特徴はどこへんにあらんやろか、なんぞみんなに長続きててろんやろか。オ1に、「老」(失礼)、社員のうまい年令構成にあらんじやなからか。報告や討論、会の運営に各々の経験、考え、力が生かされてる。オ2に、農業史といつても、社会科学、自然科学の人が参加し、研究の対象を日本に限らず、ヨーロッパやアジアと広いこと。そのため多様で奥深い報告と討論が可能となってる。オ3に、これこそ最も重要なのは、酒。ではないやろか。-----

►このような研究会の特徴を会報にも生かしてみたかと思ひます。今まで報告要旨と簡単な討論紹介をしてきましたが、ここらで100頁をこえただごとく、一発、新しいことをやってみたいと考えています。研究内容を中心としながら、広く研究生生活全体をめぐる感想などを掲載することです。たとえば、「研究」ふり返ってとか、「今やりたいこと」、「講演旅行記」、○○学会に参加して、「つかづれなよまきに」、etc 400枚3~5枚くらいです。また、遠隔地の方にも一言是非。



►いかがなぞんじょう。僕の独断と偏見で企画してしまったかと思ひます。よろしく御協力をお願ひする次第です。